俺の馬鹿な幼なじみ

ロサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の馬鹿な幼なじみ

【Ｎコード】

Ｎ７１２８Ｕ

【作者名】

ロサ

【あらすじ】

文月学園で最近噂になっている話題がある。それは『観察処分者に美人の影！？果たして真実か虚実か！？』というものである。その噂の中心人物である吉井明久の幼なじみ、織原司がＦクラスと織り成す学園コメディー。これは二次創作です！お嫌いな方はブラウザの戻るボタンを押してください！

予習問題（前書き）

ロサです！
削除した『明久のドジな幼なじみ』の改定?版『俺の馬鹿な幼なじみ』です。
では諸注意を・・・。

これは二次創作です。ＩＦがお嫌いな方はすぐにブラウザの戻るボタンを押してください。
そして作者には文才がございません。時々支離滅裂な言葉や意味不明な言葉が混じる時があります。ご注意ください。
それでもよろしいという心の広い方は、どうぞお読みください。
では、はじまりはじまり～。

予習問題

文月学園に入学して一年が経ち、再び桜が舞い散る季節となった。
俺は隣に住む寝ぼすけな幼なじみの朝食を作り、その幼なじみを起こしに向かっている。

「・・・何時まで経っても一人で起きない奴」

まぁ、もう諦めかけているが・・・。
それに昨日目覚ましをちゃんと仕掛けておけと言っておいたはずなのに・・・。

「（コンコン）おら～、起きろー！学校に遅刻すんぞー」

・・・返事はなしっと。もう慣れたしね・・・。
扉を開けて、部屋の中に入る。

「（すぴ～、すぴ～）」
「起きろ明久。学校だぞー」
「う・・・うん・・・後五光年・・・」
「おいこら、光年は距離だぞ。早く起きろ！」
「うわぁあああああ！！」

布団をひっぺがしてベッドから落とす。

「つかさ・・・？酷いじゃないかっ！」
「もう時間が無いと何度も言ったぞ！それに目覚まし時計を仕掛けろと何度も念を押したじゃないか！」
「あれ？セットなら・・・ごめん、電池切れだ・・・」

「仕方ない。帰りに単三電池買って帰るぞ。それより、早く制服に着替えて降りて来い。朝食が冷める」
「うん。・・・って早く外に出てよ！恥ずかしいじゃないか！！」
「ん？何を恥ずかしがっているんだ？」
「司は女の子なんだから「まだ寝ぼけているのか！？俺は男だと言ってるだろう！」嘘だっ！！」

なんで否定されたんだ！？
たまに明久の思考回路がわからなくなるときがある。
アニメかゲームの見すぎじゃないのか・・・？

「と、とりあえず早く！」
「あ・・・ああ・・・」

納得がいかないが時間が無い。
早くなるならそれに越したことは無いしな・・・。
扉を開け、外に出てリビングに向かう。

「・・・今度きっちり説教をしなければ・・・」

そう決心を決めた俺だった。

「お待たせ！」
「ああ・・・ってコラ。ネクタイが曲がってるじゃないか・・・」
「あ・・・ホントだ・・・」
「ったく・・・。ここをこうして・・・っと」

明久の目の前まで近づいてネクタイを正す。
・・・っと。こんなものか！
「（司っていい匂いがする・・・。性別がたまにわからなくなるけど司は男なんだし・・・でも髪はきれいだし顔はどう見ても女の子・・・。はっ！いけない！また幼なじみの性別の境界線を踏み越えるところだった）」
「・・・明久？終ったぞ？」
「へっ！？あ、あぁ・・・ありがとう／／／」
「顔が赤いぞ？風邪か？どれ」
「う、うわわわ・・・／／／（ち、近い近い！もう少しで唇が・・・！／／／）」

明久の額を出して、自分の額にくっつける。
熱は・・・無いな・・・。
だが顔の赤さが増したな、大丈夫なのだろうか・・・？

「大丈夫か・・・？学校は今日は午前までだし、帰りに医者のところにでも・・・」
「だだだだ大丈夫だよ！！さ！早く食べよ！！」
「そ、それならいいんだが・・・」

いそいそと椅子に座る明久が少し心配になる。
本当に何でもないのならいいのだが・・・

「司、早く食べないと！」
「うん」

顔の赤みが引いてるし・・・大丈夫だよな？

俺も明久の向かいに座る。

「「いただきます！」」

焼いたトーストとスクランブルエッグを食べる。

時間が無かったからこれだけだが・・・いつもの明久の食事に比べたらだいぶましなはずだ。

「おいしい！司の料理やっぱりおいしいよ！」

「そう？なら良かった」

自分が作った料理を褒められるとついつい顔がほころんでしまう。

こういうのがやはり一緒に食べてて嬉しいところなんだよなぁ・・・。

「・・・（モグモグ）」

明久もしっかり食べてるし、俺も早く食べないと・・・。

こんがり焼いたトーストに口をつけた。

「ご馳走様でした！」

「よろしおあがりなさい。お皿は置いといて。後で洗うから」

「朝食作ってもらったし僕がやるよ。司は食べるの遅いしね」

「そう？ならよろしく」

俺の食べる速度は確かに遅い。

口が小さいのか小食なのかは知らないが、いつも明久の後に食べ終わる。
女子と同じぐらいの速度だと自負しているので、なるべく早く食べようとしているのだが・・・それでもあまり変わらない。どうしたものか・・・、というのが最近の悩みだ。明久の成績もあるが。

「・・・ふう。ご馳走様でした」
「はい。じゃあ顔洗って鞄取って来るね」
「急ぎなよ？」
「わかってるよ！」

タタタと洗面台に向かっていく明久。
さて、俺は自分の食器を洗ってっと・・・。

数分して、二階で明久があわただしくしているのを聞きつつ、時計を見る。

「そろそろだぞー」
「今向かうよ！」

明久が鞄を持って降りてきた。

「お待たせ」
「じゃあ行くか」
「うん」

明久と共に学校へ向かう扉を開ける。
扉を開け、外に出て通学路を二人並んで歩く。桜の花びらが散りながらも太陽の光を受けてキラキラと輝いている。去年も似たような風景だった気がするな・・・。

「桜、キレイだね」
「ああ・・・。去年とは違う輝きだな」
「ははっ。そうだね！でも、もう二年生なんだなぁ・・・」
「感傷に浸っているのもいいが、少し急がないとぎりぎりだぞ？」
腕時計を確認する。今は八時十分、このまま歩いていくと遅刻してしまう時間だ。
「えっ！？急ごう司！」
「ああ」

こうして、文月学園二年の最初の朝が始まった。

予習問題（後書き）

感想、こんなネタで書いて欲しいや、誤字脱字等も感想でお願いします！！

第一問

「ま、間に合った・・・」
「ちょ・・・あき・・・ひさ・・・！はや・・・すぎ・・・！！」
はぁはぁと息を切らしている俺、なんか情けない・・・。明久はピンピンしてるというのに・・・。

「ご、ごめん司！！」
「遅刻ぎりぎりだぞ吉井、織原」

玄関前で渋いドスのきいた声が聞こえてくる。いうなればそれは明久の持っているゲームの主人公の声。声のした方をゆっくりと見るとそこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然の男が立っていた。

「あ、鉄じ・・・西村先生。おはようございます」
「お、おは・・・よう・・・ご、ござ「あ～、織原、無茶をせずゆっくりと息を整えてからでいい」すみま・・・せん・・・！」
「うむ。それより吉井、今『鉄人』と言いかけなかったか？」
「そ、そんなことありませんよ！」

西村先生。通称『鉄人』と呼ばれるこの先生は生活指導などを受け持つ先生で趣味はトライアスロン。その鍛え抜かれた肉体により真冬でも半袖で過ごすという生活から、生徒からは鉄人と呼ばれている。

「織原、大丈夫か？」
「は、はい・・・。すみません、時間ぎりぎりで」

「うむ、気をつけるように。それではこれを」
そういって差し出されたのは宛て名の欄に俺の名前である『織原司』が大きく書いてある封筒。
「ありがとうございます」
「あ、どーもです」
頭を下げて受け取る。
この封筒の中に、一年間過ごす俺のクラスが書いてある。
「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか？掲示板とかで大きく張り出せばいいのに」
「普通はそうするんだがな。まぁ、ウチは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環ってわけだ」
お金かけてるな・・・。一人ずつ封筒を作ってそこにまたクラスを書いた紙を入れるっていうのは・・・少々一手間かかっているというのが嬉しく感じる。
「司、少しドキドキするね」
「自分が一年間過ごすクラスが書いてるからな・・・結構頑丈に糊付けされてるな・・・」
「僕はどこのクラスになるかな・・・Dクラス・・・いやCかな・・・？司は頭いいからAクラスだよね」
「結果見ないとわからないしな・・・！なかなか開かないな・・・・！」
「あ～吉井、今だから言うがな」
「はい、なんですか？」

「俺はお前を去年一年間見て、『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？』という疑いを抱いたんだ」

・・・直球勝負だな、西村先生。変化球もなしにストレートで『バカ』と言ったぞ。

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、更に『節穴』なんて渾名をつけられちゃいますよ？」

・・・どうして明久はそこまで自信満々に言えるのかを俺は聞きたいところだ。

テスト前はあまり勉強せず、ゲームしてテレビ見ていたのに。そしてテストが終った後心配になって手ごたえを聞いたら・・・

『十問に一問は解けたよ！』

なんて自信満々に答えるから、言うことを忘れて絶句した俺の心配を何気ない顔で受け流したのに・・・。

十問に一問しか解けてないんだからFクラス・・・良くてEクラスだろうな・・・。

「織原、お前の心配も良く分かるがコイツには直球で言うことにした。喜べ吉井、お前への疑いは無くなった」

「な～む～」

「え、司？」

明久の封筒が開かれ、手のひらに折りたたまれた一枚の紙が落ちてくる。明久はそれを開き中を確認して・・・固まった。俺もそれを覗き込んで見ると、そこには『吉井明久・・・Ｆクラス』と書かれている。

「・・・」

明久、あれだけ大見得切っておいてこれはダメだって。その・・・なんか俺の方が恥ずかしいじゃないか。

「さて、織原。お前はどうだ？」
「あれ？先生は知らないんですか？」
「ああ。お前のテストは高橋先生が　担当していたからな。俺も詳しいことは知らないんだ」
「ああ、姉さんですか」

俺の姉さんこと高橋先生は俺たち二年生の学年主任を勤めている先生だ。知的なメガネにタイトスカートという格好をした先生で、Ａクラスの担任だそうだ。ちなみに俺と姉さんは従姉弟。明久の隣の一室に一緒に住んでいる。
そんな考え事をしながら封筒をやっとの思いで開く。さてさて、どこのクラスかな・・・？

「ふむ、どれど・・・」
「あ・・・」

折りたたまれた紙を開くとそこには『Ｆクラス』と書いてあった。
むう・・・なぜだ？

「ん？後ろに何か・・・」

Fと言う字に透けて違う文字が見えたので裏返すとそこには、『全部のテストが名前の書き忘れとは・・・家に帰ったら説教しますよ！』と書かれていた。つまり、名前無しで0点ということか・・・！

「織原、お前はなんというドジを踏んだんだ」
「返す言葉もございません！」
「早く吉井を連れて教室に行って来い」

言われるがまま俺は明久を呆然とした状態から覚醒させ、教室に連れて行く。

・・・こうして、俺たちの最低クラスでの生活が始まった。

第二問（前書き）

バカテスト　『化学』
問　以下の問いに答えなさい。
『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え
『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント
正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

織原　司の答え
『合金の例……鉄』

教師のコメント
見事に引っかかりましたね。ありがとうございます。

土屋康太の答え
『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント
そこは問題ではありません。

吉井明久の答え
『合金の例……未来合金（←すごく強い）

教師のコメント
すごく強いと言われましても。

坂本雄二の答え
『合金の例……オリハルコン』

教師のコメント
神が与えし鉱物で調理しなくても。

第二問

「ほら、明久。早く行くぞ。ただでさえ遅れてるんだからな」
「・・・すごいなぁ。Ａクラスの設備」
明久が窓を覗き込んでいたので、同じように覗き込むとまるでホテルのロビーを思わせるかのような絨毯に、ノートパソコンに個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートなど、なんとも豪華な設備が整っていた。
「これは確かに凄いな・・・」
「でしょ？あ、あれって高橋先生」
明久が指を指した方向を見ると姉さんが立っていた。・・・少し不機嫌な顔で。
「・・・ゴメン、先に行っていいか？」
「どうしたの司？お姉さん立派じゃないか。あんなキリッとした顔で堂々と話してるし」
「俺にはどうにも不機嫌にしか見えないんだ・・・！！頼む！！」
「そ、そう？それじゃあ行こっか」
俺たちは早々にＡクラスの視察を諦めた。俺はまだ死にたくない！！あそこにたら、視線だけでも殺されかねない！！
「（・・・帰ったら説教）」
そんな心の声が聞こえてきた俺は更に走る速度を上げるのだった。

～～～Fクラス前～～～

・・・あれ？ここ廃屋みたいにドアがぼろっちいんだけど・・・？

「ねえ司、ここが本当に僕たちの教室なのかな・・・？」

「多分・・・。俺が先に入るから明久は後から入ってきて」

「う、うん・・・」

教室のドアを開け、中に入る。

「すみません。少し遅れました」

「さっさと座れこのウジむ・・・って司！？」

そこには、意思の強そうな目をした野生味たっぷりの顔、短い髪の毛が上にツンツンと立っていてまるでたてがみのように見える俺の悪友、坂本雄二が教壇に立っていた。だが少し驚いた顔で。

「雄二酷いよ・・・。確かに怒られるのは我慢していたけど・・・ウジムシは流石に・・・ねぇ・・・（少し涙目）」

「わ、悪い！明久のバカの気配が漂っててお前だと気づかずに・・・！」

なんだろう、それも明久に対して酷い気がする。・・・否めないが。

「・・・と、いうよりなんでお前がここに？」

「・・・名前の書き忘れで・・・ね」

「なるほどな。まあいいさ。お前が居てくれたほうが何かと都合がいい」
「そうか？」
「ああ。それと後ろのバカ、さっさと来い」
「扱い酷くない！？」
明久も教室に入ってくる。バカは否定できんがな。
「と、いうより何故雄二が教壇に？」
「先生が遅れてくるらしいから、代わりに教壇に上がってみた」
「雄二が先生の代わり？」
「一応、このクラスの最高得点者、つまり『代表』だからな」
なるほどな。それなら納得だ。
「つまり、このクラスの全員が俺の兵隊ってわけだ」
ニヤリと口の端を吊り上げる雄二。まあ、コイツは何かと頭が回る奴だから、そういう意味では代表は適任だろう。
だがまあ、点数は学年最下位クラスの中で一番上だから胸を張っていえるものではないな。
でもまぁ、俺が言える立場でもないが。
「なんだ雄二、その何か企んでいる顔は」
「わかるか？まぁ、最底辺のクラスなんだからやってやろうと思っていてな」
「ほう、『戦争』でもする気か？」
「ああ。ま、説明は後でするさ」
雄二がクラス全体を見回して、俺を見る。その目には強い意志が宿

っていた。

「ふぅん、じゃあいいや。席？は・・・」

クラスを見回すと最後の列の窓から三席が空いていた。

「俺は鞄を置いているところだ」

「じゃ、俺はその隣でいいや」

「僕は窓際がいいな」

「じゃ、席につくか」

決めた席につく。畳に座布団に卓袱台・・・。家の茶の間じゃないんだから・・・。

「あ、でも座布団気持ちいい・・・」

「大当たり、だな。ちなみにハズレは綿がほとんど入っていない」

「・・・よかったぁ」

それにしてもホコリっぽいしカビ臭いし・・・。掃除しようかな・・・？

「それでは、ホームルームを始めます」

担任の先生が教室に入ってきた。覇気のない声。教壇には寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンがいた。

「このFクラスの担任になります福原慎といいます。よろしくお願いします」

名前を言い、黒板に名前を書こうとして止めた。
・・・もしかして、チョークも無いのだろうか・・・？
「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください」
皆が一斉に確認を取る。
「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」
「あー、はい。我慢してください」
「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます」
「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」
「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」
「分かりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」
・・・ここは本当に教室か？だいぶ怪しくなって来たな・・・。
「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」
・・・うん。ここは教室ではないな。
「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」
福原先生の指名を受け、車座を組んでいた生徒の一人が立ち上がり、名前を告げる。
「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

ん？なんだ秀吉か。独特の言葉遣いをする友人で演劇部のホープ。そしてもう一つ有名なのがあの顔。どう見ても女子にしか見えない顔は男子の間で有名。最近明久が越えてはならない一線を越えさせようとする恐ろしい人物だ。

「・・・と、いうわけじゃ。今年一年よろしくたのむぞい」

軽やかに微笑を作って自己紹介を終える秀吉。明久が頭をブンブン振ってイケナイ考えを出そうとしているのは見なかったことにしてやりたい。

「・・・土屋康太。趣味はとうさ・・・なんでもない。特技はとうちょ・・・なにもなし」

だいぶ静かな声が聞こえてきた。彼は土屋康太。通称『ムッツリーニ』。由来はムッツリスケベからさっきの台詞を聞いたらわかると思うがエロスの塊のような男だ。

「・・・よろしく」

あいも変わらず口数が少ないな。
しかし男しかいないな。同じ男だがむさくるしい気がしなくも無い。

「・・・です。趣味は」

ん、女子の声。このクラスでは珍しいな。

「吉井明久を殴ることです」
「誰だ！とてつもなくピンポイントで危険な趣味を持つ人は！？」

こんな趣味をもたれた日にはたまったもんじゃないな。頑張れ明久！

「はろはろ～吉井」

「うっ、し、島田さん・・・」

明久を殴る趣味を持つお方は明久曰く『僕の天敵』島田美波。
ちなみに俺も苦手な部類だ。なぜか明久と昼飯を食べていると睨まれることがあった。

そんなことを考えていると明久の番がやってきた。

「吉井明久です。気軽に『ダーリン』と呼んでくださいね♪」

なるほど、ジョークを混ぜてイメージを良くするのか。いい考え方だな。
ま、流石にその渾名で呼ぶのはいないと

『ダアアーーーリイイイイーーーーーーーーン！！！！』

野太い男たちの声の大合唱。
・・・失礼、俺の予想の斜め上を行く連中だった。

「あ、あの！遅れて・・・すみま・・・せん・・・！」

教室の扉を開け、ピンク色の髪をなびかせ入ってくる女の子。
・・・なんでここに？

『・・・え？』

「ああ、ちょうどよかったです。それでは自己紹介をどうぞ」

「は、はい！姫路瑞希といいます。よろしくお願いします」

・・・彼女はAクラスじゃないのか？成績なら・・・確か学年次席に匹敵するはず。

「あの～、質問していいですか？」

「は、はい！なんですか？」

「どうしてここにいるんですか？」

失礼に聞こえるが、俺と同じ疑問を皆が持ったのだろう。

考えれば当然だよな・・・。学年次席レベルが一番下のクラスにいるんだから。

「その・・・試験途中で高熱を出してしまいまして・・・」

なるほど、途中退席か・・・。

試験途中での退席はどんな理由があろうと0点扱いとなる。

そんな姫路さんの言葉を聞き、クラスの中でもちらほらと言い訳が聞こえてくる。

『ああ、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『『『異端者には罰を』』』

『マジすんませんでしたー！自分調子こいてました！！』

なんだ！？このクラスのほとんどがマスクをかぶりマントをなびか

せて鎌を取り出したぞ！？一体どういう状況だ！？

「・・・司、深く考えると疲れるぞ」

「・・・そのようだ」

どうなっているんだ・・・全く・・・。

「では次の人、お願いします」

「はい、織原司だ。趣味は家事で特技はなし。たまに演劇部を手伝っている。よろしく頼む」

特に何も無いように自己紹介を切り上げる。

『お、おい！？織原って・・・Ａクラスじゃ・・・』

『なんであいつもＦクラスにいるんだ？』

『織原さん！付き合ってく『異端者だ！！捕らえろ！！』ぎゃあああああ！！！』

・・・だめだ。このクラスは本当におかしい気がする。

「・・・と、とりあえず。一年間よろしくお願いします」

なんだろう、すぐにここから逃げ出したくなった。

「司君、お久しぶりですね」

「姫路。身体は大丈夫か？」

「はい。今はよくなってますので」

「ならよかった。しかし残念だな。姫路ならＡクラスだろうに」

「それは司君もでは・・・」

「俺は体調不良じゃなくて名前の書き忘れ」

久しぶりに姫路と話をした気分だ。
小学校以来かな・・・。中学校は同じクラスにならなかったからな・・・。
・・・ん？

「どうした明久。そんな声を押し殺してざめざめと泣いて・・・」
「うわあああん！つかさあああ！！」
「お、おわっ！」
明久が抱きついて来た。な、なんだ！？何があった！？
「僕もうお婿にいけないいいい！！」
「な、何があったんだ！？とりあえず落ち着け！」
とりあえず頭を撫でて慰める。あ～も～！服が涙で濡れる！ブレザー着れないじゃないか！
「そこ、静かにしてくださいね」
先生がパンパンと教壇を叩いた。
「あ、すいませ（バキィ！ガラガラガラガラガラ・・・・）・・・・え」
「え～～、替えを用意してきますのでちょっと待っててください」
教室から先生が出て行った。
「明久、何があったんだ？」
「僕を好きな人が男なんて～～～・・・！」

「・・・よしよし」

これだけは同情せざる終えない。

「司、大変だな」

「お前が原因の気もするが？」

「俺はコイツに好意を抱いている奴がいると言っただけだ」

「・・・やっぱりお前のせいだろ」

明久を抱きしめ、頭を撫でながら雄二を呆れた目で見る。

「それにしても、本当にお前は明久の姉みたいだな」

「せめて兄がいいんだが」

「お前は見た目を考えてから言え。どうみても女だろうが」

「・・・そうなんだよなぁ」

女と間違えられる容姿はコンプレックスというほどでもないがそれでも雄二に言われると悔しい。

これでも腕立てはやっているのだが・・・なぜか筋肉がつかない。

それどころか細くなった気もする。

「ほら、もういいだろ明久」

「うん・・・」

泣き止んだのか明久が離れる。

「ほら、涙。それに鼻水」

「ご、ごめん」

ハンカチを取り出し拭く。全く、しかたないなぁ・・・。

「雄二、ちょっと話が・・・」
「ん？いいぞ」
泣き止んだ明久が雄二を誘って廊下へと向かう。
・・・忙しい奴だなぁ、相変わらず。
「なんでしょうか・・・？」
「さあね・・・。それよりブレザー脱がないと・・・」
うわあ・・・結構ぬれてるなぁ・・・。予備あったかな・・・？
「変わってませんね、吉井君」
「こういう点は変わって欲しい気もするんだけどなぁ・・・」
「クスッ。でも変わって欲しくも無いと思ってるとか」
「・・・けっこう鋭いんだな、姫路」
「顔に出てますよ」
そ、そんなはずは・・・。自慢じゃないがポーカーフェイスのはずだ・・・。
「相変わらずじゃのう、司も明久も」
「よう秀吉」
「・・・久しぶり（パシャッ）」
「康太も。こら、出会い頭に写真を撮るんじゃない」
「（・・・ブレザーを脱いだ司。これは売れる）」
「それにしても、去年からの付き合いがある奴が多くて助かったよ」
「そうじゃな。話しやすくて助かるの」
「・・・（コクン）」
「そうですね。私も吉井君や司君がいてくれると話しやすいので助

かります」

ほのぼのとした会話が続く。馴染みのあるメンバーが多いのは助かるなぁ・・・。

「織原、久しぶり」

「よお島田」

「大変ねアンタも」

「ま、もう慣れてる。それにしても、ピンポイントな趣味を言い切ったな。お前」

「アタシらしいでしょ」

「・・・ここで『確かに』と頷いたら怒られそうだな」

「怒らないわよ！ってブレザー凄い濡れてるじゃない・・・。吉井に何があったの？」

「・・・聞かないでやってくれ」

「カッターも濡れて少し透けてるわよ！？」

『なにい！？』

島田の一言でクラスの男子が一斉にこちらを向いた。

「・・・島田」

「ゴメン・・・。軽率だったわ」

クラスの男子のバカさ加減に呆れた俺たちだった・・・。

「それにしても！うらやましいほど髪がキレイよねぇ・・・」

話題を変えるべく島田が口を開いたが、どうして俺の髪の話になるんだ・・・。

「そうですよねぇ・・・こんなに長いですし・・・」
島田と姫路が俺の髪の毛を触り始める。
まぁ、確かに長いとは思う。なにせ腰あたりまであるからなぁ・・・。
姉さんの趣向で髪型はポニーテールだ。
「綺麗にしておるのお」
「・・・身だしなみは大切（パシャッ！）」
秀吉まで俺の髪を触りにくるもんだから変な感じだ。
そして康太。写真を撮るんじゃない。
「・・・Fクラスの女子の集合写真、ゲット」
「待て康太。俺は男だといっているだろうが」
「ワシもじゃぞ！！」
『土屋！その写真を売ってくれ！！』
『俺もだ！！』『俺も！！』
・・・何やってんだ。
「・・・どういう状況だ、司」
「雄二、助けてくれ」
廊下での話が終ったのか戻ってきた雄二の第一声がこれだった。今この状況で頼れるのは雄二しかいない！！頼む！！
「・・・教師が帰ってきたから席に着いておけよ」
『『『土屋、この話は後で』』』
「・・・了解」

「アタシも戻るわ。また後でね」

雄二の鶴の一声により、クラスの騒ぎが収まった。流石だな。

「司、さっきはありがとう」

「べつにいいさ」

そんな会話をしているうちに、福原先生が帰ってきた。新しい教壇を持ってきて。

・・・どう見てもさっきと変わらないよな・・・。

「それでは、坂本君。自己紹介を」

そういって教壇から離れる福原先生。雄二が代表だからだろう。

「あ～、Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ。さて、皆に一つ聞きたい。Aクラスは冷暖房完備の上にリクライニングシートらしいが・・・不満は無いか？」

『大ありじゃあああああああ！！！！！！！』

Fクラス全員の魂の叫びが教室を揺るがした。いや、比喩表現じゃなくて本当に揺れた。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ」

『いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！』

『Aクラスだって同じ学費だろ！？改善を要求する！！』

皆が不満を言い始める。それを聞いた雄二は満足そうに頷いた。

「そこで代表としての意見だが・・・Ｆクラスは Ａクラスに対し、
『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う。

あれだけ騒いでいた皆が、一瞬にして沈黙した。
それはまるで、嵐の前の静けさを伝えるかのように・・・。

第三問（前書き）

バカテスト　『社会』
問　以下の問いに答えなさい。
『「三権分立」とは「司法」「立法」ともう一つは何で成り立つか？』

姫路瑞希・織原司の答え
『行政』

教師のコメント
正解です。簡単すぎましたかね？

吉井明久の答え
『憲法か漢方』

教師のコメント
どちらも間違いです

第三問

Aクラスへの宣戦布告。
それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけがない』
『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』
『姫路さんがいたら何もいらない』
『織原さんがいたら幸福だ』

・・・最後の奴は死刑だからな。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」
『何を馬鹿なことを』
『出来るわけないだろう』
『何の根拠があってそんなことを』

否定的な声がクラス中に響き渡る。
だがそれをかき消すかのように雄二が告げる。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝津古との出来る要素が揃っている。それを今から証明してやる」

この言葉にクラスの皆が更にざわめく。

「おい康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗きつつ司の写真を撮っていないで前に来い」
「・・・!!（ブンブン）」

「は、はわっ」
「こら康太。写真は勝手に撮るなって何度言ったら分かる」
「・・・・！！（ブンブン）」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる康太。
明久は何かに感動したのか尊敬のまなざしを向けている。
明久、お前は何がしたいんだ・・・？そして真似はするなよ。

「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙（ムッツリーニ）なる性識者だ」
「・・・！！（ブンブン）」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃない。でも、ムッツリーニという名前は別。その名前は男子生徒には畏怖と畏敬、女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

『ムッツリーニだと・・・？』
『馬鹿な、奴がそうだというのか・・・？』
『だが見ろ。あそこまで明らかな証拠（顔の畳の跡）を未だに隠そうとしているぞ・・・』
『ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ・・・』

未だに隠そうとする康太。ムッツリの名は伊達じゃない。
ちなみに姫路さんは頭に？マークを浮かべていた。ムッツリーニの名前の由来を教えてやった方がいいのだろうか。

「次に姫路だ。紹介する必要はないだろう。皆もその力を良く知っているはずだ」
「えっ！わ、私ですかっ？」
「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

確かに。試召戦争で彼女ほど心強い味方はいないだろう。Ａクラスの代表、霧島翔子とも対等に戦えるのは彼女ぐらいだしな。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった』
『彼女ならＡクラスにも引けをとらない』
『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』
『バカか。織原さんも絶対必要だ』

そろそろ熱烈ラブコールを送ってる奴を黙らせたほうが良いかもしれない。

「木下秀吉だっている」

木下秀吉。学力ではそんなに有名じゃないが他の事で有名だったりする。演劇部のホープだとか、双子の姉のこととか。

『おお・・・！』
『ああ。アイツ確か、木下優子の・・・』

秀吉の姉である木下優子。学力はＡクラスの中でも上位で容姿端麗。昨年俺は同じクラスだったのでだいぶ仲がいいほうだ。

「当選俺も全力を尽くす」
『確かに何かやってくれそうだな』
『坂本って、小学校の頃は神童って呼ばれていなかったか？』
『それじゃあ、アイツも振り分け試験のとき姫路さんと同じで体調不良だったのか』
『実力はＡクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

雄二も実は小学校の時にとても頭が良く、神童と謳われたほどだ。

だが中学時代は何があったか悪鬼羅刹という名前がついている。基本的に面倒見がいいのだがぶっきらぼうなので評判はあまり芳しくない。
・・・だが、やはり雄二はこういうことに向いている。確実にクラスの士気を高めている。
「それに吉井明久もいる」

・・・・士気が、急激に下がったような気がした。

「ちょっと雄二！どうしてここで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要ないよね！」
『誰だよ、吉井明久って』
『聞いたことないぞ』
「ホラ！せっかく上がりかけていた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから普通な使いを・・・って、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」
明久は悪い方で有名だが、その噂では人物名までを知っているものは誰もいない。
「そうか、知らないようなら教えてやる。こいつは『観察処分者』だ」

・・・・あ、言ってしまったな。

『・・・それってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

誰かの呟きが教室に響き渡る。

「ち、違うよっ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「司、いってやれ」

「あ、ああ。『観察処分者』は学業が少し苦手で学園生活を営む上でちょっと問題のある生徒に課せられる処分のことで、主に教師の雑用を行っている。その代わり、召喚獣は実在する物体にも直接触れることが出来る特別製だ」

学園上ではそうなっている。

詳しく知らない理由は簡単だ。明久がこの文月学園初の観察処分者であるからだ。

「つ、つかさ～！」

「流石だ司。明久のフォローも忘れない完璧な説明をありがとう」

「司君も吉井君も凄いんですね～」

姫路さんがきらきらとした目で俺と明久を見る。

・・・実際、説明だけなら何の問題も無い。明久が観察処分者になったということで興味本位で調べただけだ。

『おいおい、『観察処分者』って事は、試召戦争で召喚獣もやられると本人も苦しいってことだろ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できない奴が一人いるってこと

になるよな』
「気にするな。どうせいてもいなくても同じような雑魚だ」
「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよね？」

「だが、その幼なじみはバカじゃない。司、出て来い」
「ん？ああ」

雄二に手招きされて教壇まで向かう。

「こいつは織原司。こいつは『補習室の天使』だ」
『なんだと！？実在していたのか！？』
『学力は霧島さんに並ぶほどといわれ、あの鉄人に補習の手助けを頼まれるというほどの・・・！』

・・・？皆何の話をしているんだ・・・？

「雄二、その肩書きはなんだ？」
「お前についた肩書きだ。『鬼の補習の中で救いの天使が～』と言った奴が発祥らしい」
「・・・そいつ、見つけ次第武っ血ＫＩＬＬ」
「落ち着け司。お前の視線で数人の男子が顔を赤くして幸せそうに倒れただろう」
「知るか！」

なんで倒れたんだよ！！

『おい！大丈夫か！！』

『お、織原さん・・・もっとののしってください・・・』
『誰か！コイツを保健室に！！鼻血が大量に！！』

・・・え～、俺のせいじゃないよね？俺は悪くないよ、うん。

「話を戻すがこいつにはある特殊アイテムが配られている。司」
「あ、ああ。白衣だろ？化学の先生が着る」
「そうだ。司には教師と同じ『試験召喚獣召喚承認権』がある。つまり、フィールドを自由に作り出せるということだ」

学園長から渡された試作品アイテム。『立会い代行人証』と呼ばれている白衣だ。
なんでも新作アイテムを作るためのデータ集めだそうで召喚フィールドを作る腕輪の開発に役立てるらしい。

「どうだ？これだけの戦力がいるんだ」
『いける・・・！これなら・・・！』
『ああ！Aクラス打倒も夢じゃない！！』
『織原さんの白衣姿・・・！ハァハァ・・・』

クラスの指揮が最高潮まで高まる。
若干おかしいのもいるが、大丈夫だろう。
雄二が一息ついて、クラスに呼びかける。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」
『当然だ！！』
「ならば全員筆（ペン）を執れ！出陣の準備だ！」
『おおーーっ！！』
「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーーっ！！』
「「お、おー・・・・」」
クラスの雰囲気に圧され、俺と姫路さんも小さく拳を作り揚げていた。
「明久にはDクラスの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」
「・・・下位勢力の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」
・・・明久の読みは正しいと思う。
「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思って行ってみろ」
酷いな雄二。騙す気満々じゃないか・・・。
「本当に？」
「もちろんだ。俺を誰だと思っている」
「わかった。行って来るよ！雄二！」
「ああ！逝って来い！」
おいこら、字が違うぞ。明久天国に行ってしまうじゃないか。
「雄二。騙す気満々だよな？」
「当たり前だ。俺は明久の幸せな姿を見るのが大嫌いなんだよ」
「・・・面白がってるくせに」
「そりゃ、これだけ面白いのは他にいないだろう？」
雄二が俺の肩に手を置いた。

幼なじみの俺に言う台詞じゃないだろう・・・。

そして、明久の『騙されたーーーーー！』という悲鳴が廊下から聞こえてきた。

・・・死ぬなよ、明久・・・。

俺は教室で無事を祈るとしよう。

第四問

命がけのやり取りを終え、教室に転がり込んできた明久。
うわぁ・・・ボロボロだぁ・・・。制服繕わないといけないなぁ・・・。

「やはりそうきたか」
「少しは悪びれろよ！」
「確かに・・・」

雄二と明久の関係がよく分からないのは俺だけなのか・・・？
週に七日ほど気になってるんだが。

「吉井君、大丈夫ですか？」
「吉井、本当に大丈夫？」

ところどころ制服が破れている明久を見て心配する二人。
ほう、姫路だけじゃなく島田までとは・・・これは意外。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷だから」

女子に心配されて心配をかけないようにする明久。
なかなか男らしいじゃないか。

「そう、良かった・・・。ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・」
「つかさぁ～！」

明久が泣きながら俺のところまで駆け寄ってきた。
あのなあ、島田？

「・・・よしよし。島田、この状態の明久をからかうためにその言葉は酷過ぎるだろう」
「分かってるわよ・・・。・・・いいなぁ（ボソッ）」
「（ふうん・・・そういうこと）」

そうか、島田は明久のことが・・・。

「な、なによ！その笑顔は！」
「ん？なんだと思う？」
「うう～・・・！そんな意地悪そうな笑顔浮かべて～！言いなさいよぉ～！」
「なんだ言って欲しいのか？では・・・島田はあき「ややややっぱりいいわ！！」そうか」

これは本当らしいな。ククッ。明久も罪な男だ。

「それより、ミーティングを行うぞ」

他の場所で話し合いをするつもりのようで、雄二は扉を開けて外に出て行った。
・・・俺も用意しますか・・・

「明久、そろそろ行くぞ」
「あ、うん」

明久が少し名残惜しそうに離れる。
・・・・別に俺も名残惜しいとか思ってないぞ？

「あの、痛かったら言ってくださいね？」

「大変じゃったの」

姫路・秀吉の順番で明久に声をかけて雄二のあとについていった。

「・・・・・・・・・・・・（サスサス）」

そのあとに康太が自分の頬のあたりをさすりながら続いて行く。

「ムッツリーニ。覗いていたときの畳の跡ならもう消えてるよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「今更否定しても遅いと思うんだが」

「そうだよ、ムッツリーニがHなのは知ってるから」

「・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「ここまでバレてるのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思う」

「否定していなかったら、ムッツリーニなんてあだ名は付かなかったんだろうがな・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「――――――何色だった？」

「みずいろ」

「即答かよっ！？」

「やっぱりムッツリーニはいろいろな意味で凄いよ」

「・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

そうやってのんびりと教室内で話していると、

「ほら吉井。あんた達も来るの」

島田さんが明くんの腕を引っ張った。

「あー、はいはい」

「明久、返事は一回」
「そうよ、返事は一回！」
「へーい」
「・・・・・一度、Ｄａｓ　Ｂｒｅｃｈｅｎ――――――ええと、日本語だと・・・」
「ドイツ語かよ・・・確か・・・」
「・・・・・・・・・・調教」
「そう。調教の必要がありそうね」
「調教って。せめて教育とか指導って言ってくれない？」
「じゃ、中間とってＺｕｃｈｔｉｇｕｎｇ――――」
「・・・・・・・・・それはわからない」
「折檻だったはずだ。だがそれは悪化しているぞ島田」
「そう？」
「というかムッツリーニ。どうして『調教』なんてドイツ語を知ってるの？」
「・・・・・・・・・・一般常識」

康太の常識は絶対に一般じゃないと思う。

「相変わらずムッツリーニは性に関する知識だけズバぬけてるよね」
「・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

康太、無駄な抵抗はやめるんだ。お前のあだ名がついた時点でもう手遅れなんだから。
そんな会話をしていると屋上にたどり着いた。

雲一つない空から眩しい光が差し込む。
春風とともに訪れた陽光に、気持ちよさを感じた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことよね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなもの食べろよ？」

「大丈夫だよ。ね、司」

「ああ、用意してきてるさ」

明久が俺を期待の眼差しで見つめてくる。

・・・食事のことになると本当に瞳が輝くな

「司の弁当か。救われたな明久」

「三人分のつもりが余ってな。よければ雄二ももらってくれ」

もう一つの弁当を雄二に消費してくれと頼んでみる。

「お、サンキュー。・・・だが、このバカは司が弁当を作って来なかったらなぁ」

「改善させるように努力はしているんだが、なぁ・・・」

「あの、それってどういう意味ですか？」

姫路が首を傾けた。

・・・明久、これを期に皆がどういう目でお前を見るかわからせてやろう！

「「明久の主食って、塩と水なんだ」」

「むっ、失礼な！きちんと砂糖も食べているさ！」

「あの、吉井君？水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ・・・？」

「舐める、が表現として正解じゃろうな」
皆の妙に優しい視線に小さくなる明久。
「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いんだよな」
「し、仕送りが少ないんだよ！」
明久の両親は仕事の都合で海外にいる為、一人暮らしをしている。
一応親からの仕送りはあるらしいけど、そのほとんどはゲームや漫画に消えている。
全く・・・、ちゃんと生活費をしっかり残しておけとあれほど・・・
「・・・あの、よろしければ私がお弁当を作ってきましょうか？」
「ゑ？」
ん？姫路が作るのか？
「司君も大変でしょうし・・・その、お手伝いのつもりで言ってみたんですけど・・・」
「い、いいよね司！」
「ああ。こっちとしては大歓迎だ。頼んでいいか？」
「は、はい！」
それにしても、姫路の手料理か。よかったな明久。
「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久し振りだよ！」
「はい。明日のお昼で良ければ」
「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」
「うん！」

・・・む、ちょっと悔しい・・・って何を考えてるんだ俺は。
なんだろうか・・・モヤモヤする。

「・・・・・ふーん。瑞樹って随分優しいんでね。吉井だけに作ってくるなんて」

なんだか面白くなさそうな島田の言葉。・・・まぁ気持ちは分からなくもないが・・・。実際俺もなんかモヤモヤしてるし。

「あ、いえ！その、皆さんにも・・・・」
「俺達にも？いいのか？」
「はい。嫌じゃなかったら」
「それは楽しみじゃのう」
「・・・・・・・・・・（コクコク）」
「・・・・お手並み拝見ね」
「じゃあ頼めるか？」
「はい！任せてください！」

・・・ま、いいか。自信がありそうだし期待しておこう。俺も手間が一つ減るってもんだ・・・し・・・。

「どうしたのじゃ？司よ。落ち込んでいるように見えるが」
「いや、なんでもない」

・・・少し、寂しくなってしまった。
ええい！こんなのは俺のキャラじゃない！！
バカな子ほど可愛いということか・・・？

「わかりました。それじゃ、皆さんに作ってきますね」

「姫路さんって優しいね」
「そ、そんな・・・・」
「今だから言うけど、僕初めて会う前から君のこと好き――――――」
「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」
「――――――にしたいと思ってました」
「明久、それは欲望をカミングアウトした変態だぞ」
「恨むぞ僕の判断力」
「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな」
「だって・・・・お弁当が・・・・僕の命が・・・・」

・・・・・・。

「あ、あのな明久。ちゃんと作ってやるから安心してろ」
「う、うん！」

明久が嬉しそうに顔をほころばす。
・・・まずい。まずいまずい・・・！なんで嬉しくなったんだ・・・？

「ふふっ。司君スッゴク嬉しそうですね（ボソッ）」
「ひ、姫路・・・」
「なんとなくその気持ちはわかりますから」
「そ、そうか」
「話がかなりそれたな。さて、試召戦争の話に戻ろう」

あ、すっかり忘れてた。

「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなのじゃ？段階を踏んでいくのならEクラスじゃろうし、勝負に出るならA

クラスじゃろう？」
「そういえば、確かにそうですね」
「まぁ、なんとなく分かる」
「流石だな、司」
「司、どういうこと？」
「とりあえずＥクラスを攻めないのは簡単。戦うまでも無い相手だからだよ」
「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」

試験の点数で振り分け試験を行われているので、ＥクラスはＦクラスより点数は高い。
それは、振り分け試験の時の話。今は状況が異なる。

「振り分け試験の時は、な。姫路さんに問題が無い今ならＥクラスには勝てる」
「だから、Ａクラスが目標である以上はＥクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」
「？それならＤクラスは正面からぶつかると厳しいの？」
「ああ。確実に勝てるとは言えないな」
「だったら、最初っから目標のＡクラスに挑もうよ」
「初陣だからな、派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？それに、打倒Ａクラスの作戦に必要なプロセスだしな」
「あ、あの！」

と、姫路にしては珍しい大きな声。どうしたんだろう？

「ん？どうした姫路」
「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」
「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談さ

れて――――」
「それはそうと！」
雄二の台詞を遮るように明久が大きな声をだした。
「さっきの話、Ｄクラスに勝てなかったら意味が無いよ？」
「負けるわけ無いさ。周りの面子を見てみろ明久」
「・・・美少女が三人、バカが二人、ムッツリが一人いるね」
「誰が美少女だと！？」
「え！？雄二が美少女に反応するの！？」
「・・・・・（ポッ）」
「ムッツリーニも！？どうしよう司！僕一人じゃツッコミきれないよ！」
「知りません。人をムッツリ扱いしないでください（プイッ）」
「えええええ！？司はムッツリじゃないよ！美少女だって！」
フンだ。どう言おうとかまってあげないもんね！
「それもどうじゃろうか・・・。とりあえず落ち着くのじゃ」
「そ、そうだな」
「いや、その前に美少女で取り乱すことにツッコミを入れたいんだけど」
「ま、要するにだ。これだけの面子がそろっているんだ。お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」
明久の心配なんて毛ほども効かないかのように笑い飛ばす雄二。
「いいか、お前ら。ウチのクラスは――――――最強だ。」
雄二が言う。それだけだ。立った一言なのにここまで奮い立たされ

るのはきっと、そんな確信を雄二の言葉から得たからだろうか。
夢物語が現実に変わるような・・・そんな気持ちになる。

「いいわね。面白そうじゃない！」
「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」
「・・・・・・・・・・・（グッ）」
「が、頑張りますっ」

打倒Aクラス。
Fクラスにとっては荒唐無稽な夢かもしれないけど、夢は見るためにあるし、叶えようと努力することから始まる。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

ここに、最下層のFクラスが最上層であるAクラスに対する下克上が始まった。

「ほぉ～っ、今年の2年は1学期初日から試召戦争やろうってのかい？　面白いじゃないか、承認してやりな」
「承知いたしました」
「今回の戦争、高橋教諭は思うところがあるんじゃないかい？」
「・・・はい。織原司君です」

「残念かい？弟が敵対することが」
「正直に言えば。全く・・・あれほどミスをしないように言っておいたというのに・・・」
「名前を全部書き忘れるとはね。アイツならＡクラスでも確実に上位に入るのにねぇ」
「帰ったら説教です」
「ククッ！今のアンタの顔をＡクラスにいる子達に見せてあげたいねぇ。きっと驚くさね」

良く『愛想に欠ける』といわれる高橋先生は何のことかわからずきょとんとしていたが、司のことになった瞬間少し拗ねた顔をしていたことは学園長の胸のうちにしまった。

第四問（後書き）

誤字脱字、一人称が違うなどよろしくお願いします。
感想も待ってますからねー！

第五問

試験召喚戦争　Ｄクラス対Ｆクラス　開戦

なのだが、

「俺は回復試験を受けるだけでいいのか？」

「ああ。お前は秘密兵器だ。そう簡単に出せるかよ。それに、今回姫路がいれば事足りるしな」

「了解」

「ま、その分いい点を取ってこいよ。次のこともある」

「分かってる。じゃあ行くか姫路」

「はい。それでは行って来ますね」

廊下に出て、回復試験会場に向かう。

「それにしても、吉井君は本当に司君が好きなんですね」

「ど、どうしたいきなり」

「だって、あんな風に嬉しそうにしていたら誰でもそう思いますよ？」

「ずっと一緒にいたからな。部屋がお隣だし」

「うらやましいです。私はあまり話す機会がありませんでしたから」

「これから作っていけばいいじゃないか。幸か不幸か同じクラスだし」

「そうですね。がんばりますっ！」

姫路が胸の前で両拳を握る。

「それに、料理も頑張ってアピールしちゃいます！」

「頑張れよ。おっと、ここだここだ」

回復試験会場に着く。

「「回復試験お願いします」」

「はい。・・・司君？」

「ね、姉さん・・・！」

「・・・帰ったら説教ですからね。それでは、席に座って筆記用具のみを出して待っていてください」

「は、はい・・・」

「司君も、お姉さんには頭が上がらないんですね」

「う・・・まあな・・・」

そういいながら席に座る。

ここで、この文月学園のテストを紹介しよう。

普通の学校なら、テストは１００点満点だ。

しかし、ここ文月学園のテストは違う。

点数の上限なんてない、時間が許す限り何点でも取ることのできるテストとなっている。

そして、そのテストの点数が召喚獣の力に変わる。点数がよければより強く、悪ければ弱くなる。

なので、皆テストでよい点を取ろうと努力するようになる。

それが学園長の考え方であり、この試験召喚獣戦争である。

「それでは、準備が良ければ始めてください」

点数は限られなくても時間は限られている。

名前を忘れずにっと・・・。じゃ、本気で行くとしますか。

その頃、戦争場所では・・・

明久ｓｉｄｅ

『さぁ来い！この負け犬が！』
『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！』
『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな』
『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』
『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には隅が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう。ちなみに織原はいない』
『お、鬼だ！誰か助けっ、ーーーーーいやぁぁーーーーー（バタン、ガチャ）』

よし、試召戦争の雰囲気は大体分かった。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」
「ん、なに？作戦？何て伝えんの？」

ここで僕が出す指令は一つだけだ。

「総員退避、と」
「この意気地なし！」

殴られた。しかもチョキで。

「目が、目がぁっ！」

「目を覚ましなさい、このバカ！」

その覚ますべき目に激痛が！涙で前が見えないよ！？

「アンタは部隊長でしょう！臆病風に吹かれてないで木下達を助けに行くわよ！」

もっともらしいことを言う島田さん。

確かにそうだ・・・。

「そうだね、頑張ろう島田さ「吉井！前線部隊が後退を開始したぞ」

「総員退避よ」島田さん！？」

僕の感動を返して欲しい。

「吉井隊長！代表より伝令です！」

「横田君。雄二は何て言ってたの？」

「はい、

『逃げたら殺す』と」

「全員突撃ーーーーーーー！」

気がついたら戦場に向かって全速力で駆け出していた。これもクラスを思うが為。

回復試験側

「・・・ふう。これでいいかな」

「そうですね」

「二人とも、お疲れ様でした。採点をしますので待っていてください」

高橋先生が教壇に戻って赤ペンを取り出した。

そして、目にも留まらぬ速さで採点を開始する。

「はやっ！！」

「凄いですね・・・」

・・・１０分で採点が終了した・・・

「・・・採点終了です。では織原君か「すみません、高橋先生」あら？西村先生、どうしましたか？」

「戦死者が多いので織原を借りにきました。坂本に聞いたところ、

織原は今回は出陣しないそうなので」
「・・・わかりました。織原君、点数は後で教えますのですみませんが手伝いに行ってください」
「はい。じゃあ姫路、頑張ってこいよ」
「あ、はい！司君も頑張ってください！」
「おう」

試験場から出る。

「いつもすまんな、織原」
「かまいませんよ。俺も自分がどれだけ理解できているか試せるので」
「そういってくれると助かるよ。ほれ、白衣だ」
「あ、助かります（パサッ）」
「・・・そういえば、何故お前はブレザーを着ていないのだ？」
「明久の涙で濡れてしまって」
「吉井に何があったんだ！？」
「それは、まぁ・・・明久のために黙秘させていただきたい」
「ま、まぁかまわんが・・・苦労がたえないな」
「慣れました」

補習室のドアの前に着いた。
中からいろんな人の呻き声が聞こえる。
西村先生が入り、俺も後に続いた。

「お前ら喜べ。俺の他にも助っ人を用意してやった」
『へ？・・・って織原君！？』

俺を見た瞬間、皆が救われたような顔をしていた。

どんな補習をしたらここまでみんなが疲れた顔をするのだろうか・・・

「え～、織原です。終戦まで俺も助っ人で教えるので頑張ってください」

『はい！！』

疲れなんてなかったかのように元気な声で返事をしてくれた。

さて、教えていきますかね・・・。

「お、織原君、ここなんだけど・・・」

最前列の女子が質問してきた。

・・・数学、しかも図形か。

「ああ、頂点Bから直線ACにむかって垂直に直線を引くと・・・」

「あ、これなら・・・。ありがとう！」

「織原君！次は俺に！」

「まってろ～」

それから、Dクラスの代表を討ち取ったという声を聞くまで引っ張りだこだった。

西村先生も質問に丁寧に答えていたので鬼の補習とまで言われている補習が皆楽しそうにしているのが印象的だった。

「よし！これで補習は終了だ」

『お疲れ様でしたーーー！』

ふぅ、終わったか。

「お疲れだったな、織原」
「いえいえ」
「そうかそうか。では、何かあったらまた頼むぞ」
「はい」
俺は背伸びをしながら、補修室を出て、Dクラスに向かった。
さて、明久達は何をしているかな・・・？

Dクラスの教室の扉を開けると、なぜか明久の手首を握っている雄二がいた。
「・・・何しているんだ！？」
「お、戻ってきたか司。ちょっと待ってろ・・・フンッ！」
「ぐあっ！」
明久の手首が捻りあげられ、たまらず悲鳴をあげ、握りこんでいた包丁を取り落としてしまう。
って、包丁・・・？
「……」
「……」
「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいよね」
「……」
「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知ら

な関節が折れるように痛いぃっ！」
「今、何をしようとした」
「も、もちろん、喜びを分かち合う為の握手を手首がもげるほどに痛いいぃっ！」
「おーい。誰かペンチを持ってきてくれ！」
「す、ストップ！僕が悪かった！」
「……チッ」

・・・てか明久、それは康太のエロの否定ぐらい遅いと思うぞ。
明久が手首を解放された。ものすごい痛そうだ……。
というかペンチなんて何に使う気だったんだ？

「……ブツブツ……ーーーーー生爪ーーーーー」

今のは聞えなかった。うん、そうだそうしよう。

「明久？その包丁何に使う気だったのかな？（ニコッ）」
「つ、司！？いや、その・・・雄二が僕をを船越先生と結ばせるように発言したから・・・」
「・・・船越先生？」

えっと・・・そういえばあの先生婚期（４５歳／♀・独身）を逃して、生徒達に単位を盾に交際を迫っているとか聞いたような・・・。
それとなんの関係が？

「雄二の奴が僕を船越先生と結婚させようとしているんだ！！」
「・・・雄二？」
「ああ、そういわなければクラスの士気が上がらなかった」
悪びれる様子なし・・・。ちょっとはこう、『すまないな』でも言

えばいいのに・・・。

「・・・さて、Dクラス代表。設備の交換はナシでいいぞ」
「どうしてだ？俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」
「もちろん、条件がある」

やっぱり何か考えていやがるなこの策士。

「一応聞かせてもらおうか」
「大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい」

雄二が指差したのは窓の外にあるもの。

「Bクラスの室外機か」
「教師にある程度睨まれる可能性もあるとは思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」
「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

もっともだな。俺でもその質問はする。

「次のBクラス戦に必要なんでな」
「……そうか。その条件を呑ませてもらおう」
「タイミングは後で話す。今日はもう行っていいぞ」
「ああ、ありがとう」

じゃあ、と手を挙げてDクラス代表の平賀は帰っていった。
・・・なぜか俺のほうをチラチラと見ながら。

「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、
今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！解散！」
雄二が号令をかけると皆雑談をしながら、Ｆクラスへと向かいはじめた。

「よう、お疲れさん」
「お前こそ。鉄人が来たからああ言ったが、点数は？」
「明日の早朝に雄二に点数を書いた紙を届けるそうだ」
「そうか。ま、お前なら大丈夫だろう。次はＢクラスだ。頼むぜ」
「任せろ。今日出れなかった分は明日暴れてやるから」
「ああ。期待してるぜ」
拳同士をコツンとぶつけた。
これで、Ｄクラス戦が幕を閉じた。

帰宅後、姉さんが帰ってきて俺は床に正座させられていた。かれこれ一時間半ぐらいずっと。
「しーくん！あれほど名前を書き忘れないようにといったでしょう

！」
「ご、ごめん！！俺も書き忘れていたなんて思ってなくて！！」
「折角同じ教室になれると思っていたのにー！」
「ね、姉さん！正座で足が痺れてうひゃああ！」
「しーくんにはこうです！えい！えい！」

姉さんが痺れている俺の足をつついてくる。

「ね、姉さん許しひゃわあああ！！」
「えい、えい！！」

足の痺れがなくなるまでずっと足をつつかれ続け、明久が俺の悲鳴を聞きつけて助けてくれた。

「吉井君はどうしますか？久しぶりに泊まりますか？」
「あ、よかったら」
「では二人とも、お風呂に入ってきてください。布団はしーくんの部屋に敷いておきますから」
「え！？つ、司とお風呂！？どうしよう・・・僕明日異端審問会で裁かれないかな・・・」
「何を言ってるんだ明久？」

こうして、夜が更けていった。

第六問（前書き）

バカテスト　『家庭科』
問　次の問いに答えなさい
『料理で使われる「さしすせそ」を答えなさい』

織原司・坂本雄二・吉井明久の答え
『砂糖、塩、酢、醤油、味噌』

教師のコメント
正解です。織原君はわかりますが、吉井君と坂本君が知っていたことに驚きました。意外と家庭的なのでしょうか？

木下秀吉の答え
『砂糖、塩、酢、　、　』

教師のコメント
醤油と味噌がわからなかったようですね。「しょうゆ」は「せうゆ」と読み、「みそ」は最後の「そ」を使います。基本となりますので覚えておきましょう。

姫路瑞希の答え
『酢酸、シュウ酸、水酸化ナトリウム、青酸カリ、ソーダ』

教師のコメント
大変危険な調味料ですね・・・。姫路さん、これは化学ではありませんよ？唯一の救いは最後の「ソーダ」ですが、まさかこれも化学薬品ではありませんよね？

第六問

Dクラス戦に勝った翌朝、俺は今日明久と一緒に登校せずに、先にFクラスに入り席に座る。
「おはよう。秀吉。」
「おはようなのじゃ、司。今日はテスト漬けじゃから頑張らねばの……」
秀吉がすこし疲れたような表情をする。
そう、今日は試召戦争で消費した点数を補給する為にFクラスの皆はテスト漬けなのだ。
しかし、俺は昨日受けてるし、戦争にも出ていないから点数を消費していない。
「アハハ…まあがんばりな。俺はする必要がないけどね」
ガラガラ
「おはよー」
「なんだ、司と一緒じゃなかったのか？」
「ん、おはよう雄二」
雄二は英語の教科書を持っている。ふむ、
「神童再び、ってか？」
「けっ、そんなんじゃねえよ」
「そういや、昨日は皆には何も言われなかったの？」
「ん？何がだ？」
「Dクラスの設備の事。」

ああ、そういえばＤクラスの設備はいらないと雄二が言っていたからな。
たしかに、折角勝って手に入るはずのＤクラスの設備を手放したんだし、クラスの皆に理由も言わずに勝手にそのような事をすれば不満がでるというのも必然というものだ。

「ああ。皆にもきちんと説明をしたからな。問題ない」
「ふーん」

いつ説明したんだろう？ああ、俺達が来る前にいったのかな。
皆が素直に聞いたのならば、それは昨日の雄二の働きを評価しての事だろう。もっと上を狙えると分かった以上、Ｄクラス程度の興味がないといったところだろうか。

「それよりお前はいいのか？」
「何が？」
「昨日の後始末だ」

ああ、明久と船越先生の件のことかな？

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされると分かっていながら行動するなんてありえないよ。」
「いや、俺の始末じゃなくて」

明久が雄二の始末と勘違いしている。
返り討ちにあうだけだからやめておこうな明久。

「一体何がいいたいーーーーー」
「吉井っ！」

「ごぶぁっ！」

明久の台詞が突然の島田の鉄拳によって遮られる。
いきなりすぎて反応できなかった・・・！
というより、なんで怒っているのだろうか？

「し、島田さん、おはよう……」
「おはようじゃないわよっ！アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人にしたてあげたわね……！」

明久が「あ、そうか」と思ってそうな顔をしている。
って、そんなことしたのか！？

「おかげで彼女にしたくない女子ランキングが上がっちゃったじゃない！」

代わりにお姉さまになってほしいランキングNO、1じゃなかったか？
島田も中々不憫だね。

「――と、本来は掴みかかっているんだけど」

島田が急に冷静さを取り戻す。
掴む前に殴っているから大差ないんじゃないのか？

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」
「うん。さっきから鼻血が止まらないんだ」
「いや。そうじゃなくてね」
「ん？それじゃ何？」

「一時間目のテストだけど」
島田が楽しそうに、本当に心から愉しそうにそう告げる。
「監督の先生船越先生だって」
明久が血相を変えて教室から飛び出した。
入れ違いになるように、康太が教室に入ってきた。
「・・・なにがあった？」
「あ、おはよう康太」
「・・・おはよう、司。それで？」
「うん、船越先生」
「・・・なるほど」
康太が妙に納得したかのようように頷く。今のでわかっちゃうんだ・・・
そんな会話をしてると、明久の本命？の船越先生が入ってきた。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「うあー……づかれたー」
机に突っ伏す明久。
朝から船越先生とひと悶着起こしてさらに、四教科ものテストを終わらせたんだし、そりゃ疲れるよね。

明くんいわく近所のお兄さん（三十九歳／独身・・・お兄さん？）を紹介し、昨日の事もその事だという事にして、争いを避けたそうだ。

「うむ。疲れたのう」
「お疲れ」
「……（コクコク）」

無口な康太もいつの間にか明久の近くに寄っていた。

「つかさ～、僕のお弁当ある？」
「いや、姫路の弁当があるからな、自分の分しかつくっていない」
「はい。弁当を持ってきましたので……その」
「おお、楽しみじゃのう。」
「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

と後ろに隠していたバッグを出してくる。
姫路が約束通りに弁当を持ってきていた。

「迷惑なもんか！ね、雄二！」
「ああ、そうだな。ありがたい」
「そうですか？良かった～」

ほにゃっと嬉しそうに笑う姫路。不思議だ。ご馳走してあげる側なのに喜ぶ何て。
でもわかるかもしれない。作ったものを「おいしい」って言われたときは嬉しいものだ。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……」

明久を親の仇のように睨んでいる島田さん。
君はなんで怒っているんだ。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上に行くかのう」
「そうだね」

確かに、こんなかび臭い教室より、屋上の気持ちいい空間で弁当を味わうべきだろう。

「そうか。それならお前らは先に行っててくれ」
「ん？雄二はどこか行くの？」
「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」
「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

と珍しく気遣いをみせる島田。

「悪いな。それじゃ頼む」
「おっけー」
「きちんと俺達の分をとっておけよ」
「大丈夫だってば。あまり遅いと分からないけどね」
「分かった。そう遅くはならないはずだ。じゃ、行ってくる」

雄二と島田は財布を持って教室を出て行った。きっと一階の売店に行ったんだろう。

「僕らも行こうか」
「そうですね」

姫路が抱えていたバッグを明久が受け取り、屋上まで歩く。

「天気が良くてなによりじゃ」

「そうだねー」

屋上へと続く扉の向こうは抜けるような青空。絶好のお弁当日和だ。

「あ、シートもあるんですよ」

姫路がバッグからビニールシートを取り出す。準備万端だね。ピクニック用のセットだったりするのだろうか。

わいわいと準備を始める。幸い屋上にはだれも居らず俺達の貸し切り状態である。

「気持ちいいねー」

「眠くなってくるよ」

「そうじゃな」

「……（コクリ）」

ビニールシートに足を投げ出す。日差しと風が気持ちよかった。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

姫路が重箱の蓋を取る。

『おおっ！』

俺たちは一斉に歓声をあげた。

凄くおいしそうだ。唐揚げやエビフライにお握りやアスパラ巻きなど、定番メニューが中に詰まっている。

自信がないですけど、ってこれは俺の方が自信なくすよ。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先にーーー」

「……（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムッツリーニっ」

動きの素早い康太がエビフライをつまみ取った。

そして流れるように口に運びーーーーーー

「……（パク）」

バタン　　ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「……」

「……」

「……」

明久、秀吉と顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君！？」

姫路が慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。

「……（ムクリ）」

康太が起き上った。

「……（グッ）」

そして、姫路に親指を立てる。多分『凄く美味しいぞ』と伝えたいんだろう。

康太……！君は今最高に輝いているよ・・・！

「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

康太の言いたいことが伝わったのか、姫路が喜ぶ。だがしかし、康太は生まれたての小鹿のように足を震わせている。

「良かったらどんどん食べてくださいね。」

姫路が笑顔で勧めてくる。

そんなに嬉しそうに勧めてくると断りづらい……！

むしろ、どんなにまずかろうとも残さず食べてやる、という気になってくる。

だが、俺には目を虚ろにさせて、今にも死んでしまいそうな康太が忘れられない。

（秀吉、司。あれ、どう思う？）

姫路にきこえないくらい小さな声で明久が俺達に問う。

（…どう考えても演技には見えん。）

演劇部のエース、秀吉が言うんだ。決して冗談ではなく、素で康太は倒れ伏しているのだろう。

（康太が演技する理由が見当たらないのを見ると・・・確実に危ないな・・・）

（だよね。ヤバイよね。）

（明久、司。お主ら、身体は頑丈か？）

（正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから。）

（恐らく、一般人並みだと思う。）

表情は当然笑顔のままだ。姫路にこの会話と俺達の驚愕を気取らせて落ち込ませるのは男がするべき所業じゃない。

（ならば、ここはワシに任せてもらおう。）

勇気ある秀吉の台詞が囁かれる。

（そんな、危ないよ！）

（そうだよ！何が入ってるか分からないんだぞ！？）

（大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのじゃ。）

・・・なかなか見た目に合わずタフな胃袋をお持ちのようだ。ジャガイモの芽は毒といわれているはずだが・・・？

「おう、待たせたな」

「ゆ、雄二・・・」

「どうした？お、美味そうじゃないか。いただきます（パクッ！）」

「あ！」

「どうした？つか（バタンーーガシャガシャン！ガタガタガタガタ！！！）」

雄二が玉子焼きを口に入れ、ジュースの缶をぶちまけて康太と同じように豪快に顔から倒れた。

「さ、坂本！？ちょっとどうしたの！？」

・・・・ま、まずい・・・！これは本物だ・・・！！

震える雄二の介抱に向かうと、目で俺に訴えかけてくる。

「（あ、明久の奴、毒を盛ったのか・・・？）」

「（・・・姫路さんの実力なんだ）」

「（な、なんだと・・・！？）あ、足が攣ってな・・・」

雄二、その優しさが俺の涙腺を過剰に刺激してくる。

康太と雄二を介抱しつつ、明久に目で訴えかける。

「（明久、島田を遠ざけるんだ）」

「（了解）島田さん、その手のついてるあたりに虫の死骸が落ちて

たよ」
「ええ！？早く言ってよ！」
「ごめんごめん、雄二に気を取られてさ。言い忘れてたよ。手を洗ってきた方がいいよ」
「そうね。ちょっと行ってくる」

・・・これで、被害者は少なくなるな。

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」
「全くだな」
「運が悪い」

はっはっは、と男四人で朗らかに笑う。
一方その後ろ側で俺達は必死に作戦会議をしていた。

（明久、今度はお前がいけ！）
（む、無理だよ！僕だったらきっと死んじゃう！）
（流石のワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る……）
（すまん、俺もあれは流石に）
（雄二がいきなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）
（そうかのう？姫路は明久に食べてもらいたそうじゃが）
（そんなことないよ！乙女心をわかってないね！）
（いや、わかってないのはどちらかと言うとお前の事だとーーー）
（ええい、往生際が悪い！）

「あっ！姫路さん、アレはなんだ！？」
「えっ？なんですか？」

明久が指した明後日の方向を姫路が見る。

（おらぁっ！）
（もごぁぁっ！？）

その隙に明久が雄二の口の中一杯の弁当を押しこんだ。目を白黒させているので、顎を掴んで租借するのを手伝ってあげている。・・・・鬼畜外道とはまさにこのことだと俺は改めて幼なじみに恐怖を覚えた。

「ふぅ、これでよし」
「……お主、存外鬼畜じゃな」

秀吉が明久に告げるが明久は無視した。
そして雄二がさらに震えている。
俺は雄二にお祈りを捧げていた。

「ごめん、見間違いだったよ」
「あ、そうだったんですか」

こんな古典的な手に引っ掛かるなんて、姫路の将来が心配になるほど純粋だなぁ。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走さま」
「うむ、大変いい腕じゃ」

雄二の大活躍によってお弁当は無事始末完了。俺たちの気持ちはこの青空より晴れやかだった。

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」
「うん。特に雄二が『美味しい美味しい』ってすごい勢いで」

隣で俺にもたれかかっている雄二がフルフルと力なく首を振る。

「そうですかー。嬉しいですっ」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二？」

「う……うぅ……。あ、ありがとうな、姫路…」

ヤバい。目が虚ろだ。雄二、しっかりしろ！

「そういえば。おいしいと言えば駅前に新しい喫茶店が――」

話題をそらす明久。これ以上下手な事をいって『それじゃ、また作ってきますね』何て言われないようにする配慮。ナイス！

「ああ、あの店じゃな。確かに評判がいいの」

「俺もあそこのパフェが絶品だと聞いたことがある」

「え？そんなお店があるんですか？」

「うん。今度今日のお礼に雄二がおごってくれるってさ」

「てめ、勝手なこと言うなっての」

あ、雄二が復活した。康太は未だに復活してこない。

とりあえず、康太の介抱でもしていよう。

えっと、コンクリートだと頭が痛くなるだろうから膝枕でも・・・

よいしょっと。

その後、明久の作戦はどうやら成功したようだ。

取りとめのない会話の続く、ほのぼのした時間が過ぎる。

「司、足痺れんのか？」

「へ？司何やって・・・って膝枕！？」

「ああ。目が覚めたときに康太頭痛くなりそうだったからな」

そういうと、明久がうらやましそうな目で見てきた。

「いいなぁ・・・」

「・・・家に帰ったらしてあげるから今は我慢しなさい」

「ほんと!?やった!」

嬉しそうに万歳する明久。男がしてもあまり嬉しくないと思うんだがなぁ・・・

「本当に、司は明久のお姉さんみたいじゃの」

「男なんだってことを忘れていないか?秀吉」

秀吉・・・君も女顔ということを忘れてないか・・・?

「む、ちょっと甘いものが食いたくなってきたな」

雄二がそういった。

「あ、そうでした」

姫路がポン、と手を打った。

「ん?どうしたの?」

「実はですね――」

ごそごそ、とバッグを探る。

「デザートもあるんです」
「ああっ！姫路さんアレはなんだ！？」
「明久！次は俺でもきっと死ぬ！」

雄二が命がけで作戦を止めにかかる。ッチって言うんじゃない明久！！これは本当に俺たちの命がかかっているんだぞ！

（明久！俺を殺す気か！？）
（仕方がないんだよ！こんな任務は雄二にしかできない！ここは任せたぜっ）
（馬鹿を言うな！そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできんものはできん！）
（この意気地なし！）
（そこまで言うならお前にやらせてやる！）
（なっ！その構えは何！？僕をどうする気！？）
（拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後で存分に詰め込んでくれる！歯を食いしばれ！）
（いやぁー！殺人鬼ーーー！）

・・・どうする？明久に任せていいのだろうか？
ただでさえ俺が作らない時は塩水で胃袋が虚弱になっている。
そんな状態で明久があれを食べたらどうなる？
・・・一発昇天・・・！！

（俺が行く！！）
（つ、司！？いやしかしお前では身体が！！）
（そ、そうだよ！死んじゃうよ！）
（お前は率先して俺を殺そうとしていたよなぁ！！）
（・・・明久、今日はパエリアを作ろうと思っていたんだ）
（え・・・？い、言わないでよ・・・！）
（・・・生きて帰れたら、今までの中で一番美味いの作ってやるから）
（そんな、そんな今わの際みたいなこと言わないでよつかさあ！！）
（雄二、康太を頼んだ）

「どうかしましたか？」
「あ、いや！なんでもない！」
「あ、もしかして……」

姫路が顔を曇らせる。
まさか嫌がってるのがバレたか！？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ」

言われてみれば容器に入っているデザートはヨーグルトと果物のミックス（のように見えるもの）だ。箸で食べるのは難しいかもしれない。

「取ってきますね」

スカートを翻し、階下へと消える姫路。今がチャンスだ。

「よし、この間に頂かせてもらう」

戦場に向かう戦士のように緊張しながら容器を手に取る。

「……すまん。恩に着る」

「司・・・ごめん。ありがとう」

「ワシが不甲斐ないばかりに……すまないのじゃ」

申し訳なさで俯きがちな明久達に俺は笑いかけ、容器を天に掲げながら口の中にデザートを丸ごと落とし呑みこむ。

行儀が悪いけど、仕方がないんだ！

「むぐむぐ。あれ？意外と普通だとゴばぁっ！」

・・・あ、あれは・・・なんて綺麗な・・・お花畑。

それに、おじいちゃんが手を振っている。

「……雄二。」

「……なんだ？」

「……さっきは無理矢理食べさせてゴメン」

「……分かって貰えたならいい。」

補習室の鬼をも和ませる『天使』は、天へと帰っていった。

「「「だ、駄目だ！！戻って来い（来て）（来るのじゃ）！！」」」

その後、これからの作戦などを話したり、Ｂクラスに宣戦布告もしたのだが、俺が起きることはなかった。

第七問

いつもの如く、屋上での作戦会議タイム。

「さて、Ｂクラス戦だが、姫路のことはもう知れ渡っていることだろう」

「そりゃそうだろ。Ｄクラス戦で出したからな」

「そこで、だ。司にはＢクラスへスパイとして行ってもらう」

「つ、司が抜けたらもっと危ないんじゃないの！？」

明久があせったように雄二の作戦に文句をつける。

まぁ、Ｆクラスの点数は俺と姫路が支えているようなものだしなぁ……。

「こちらには姫路がいる。それに、クラスの奴らには『あること』を言っているから大丈夫だ」

「あること？」

「『根本恭二とＣクラス代表は付き合っている』という情報だ。これはムッツリーニからの提供故に信憑性は高い」

「ほう、それはなんともいい話じゃないか」

去年同じクラスだったので二人のことは知っているが、まさか付き合っていたとは。うむうむ、仲良きことは良きことかな。

「それを、ウチのバカ共に広めるとどうなるか」

「……他人の不幸は蜜の味」

「……極刑希望」

「おい、明久と康太。フードを被りマントを着て鎌を天高く翳して

どこへ行くつもりだ」
「……男には、やらなければいけない時がある。それが今だ」
「僕達は学園の風紀のために根本君を粛清しないと駄目なんだ」
「格好よく言っている上に自分たちの行為を正当化しようとしているところ悪いが、それは妬みによるものだと知れ」
「まあ、この意気込みがクラス中に広まっている」

雄二、なんてことを。

「今のFクラスは点数こそ低いが、今の行動力だけならAクラス並だ。故に、自分の懐には甘くなる。そこで、司はそこにもぐりこんで機会をうかがって欲しい」
「なるほど。そういう魂胆じゃったか」
「確かに、それならいけそうですね」
「でも、待って。織原は顔が広すぎるからばれちゃうんじゃ……」
「そこで、これを着て明日学校に行ってもらい、Bクラスに紛れ込ませる」

雄二が取り出したのは、紙袋。
その中にはなんとこの学校の女性用制服が入っていた。

「ゆ、雄二？どこで手に入れたんだよ、それ」
「ちょっとな。これならあとは髪型を変えれば問題ないはずだ」
「むぅ、確かに行ける気がするの」
「た、確かに、これ以上とない変装ね」
「もちろん本人次第だ。頼めるか？司」
「……クラスのためだ。その作戦は確かに合理的だしな。いいだろう」
「助かる。それでは、明日に備えてくれ。ああ、司は開戦前に体育館裏で打ち合わせをするのでそのつもりで」

『了解』

こうして、俺は女装して学園に登校するという前代未聞の作戦が始まった。

そして、作戦当日

「……これで、ＯＫか」

姉さんが出発した後、昨日渡された制服を着る。

スカートはズボンと違い、スースーするのがいただけないな……。

「さて、髪型は……面倒だ。括るのを止めよう」

ポニーテールにしている人が髪を下ろすと印象が変わるというのを聞いたことがあるので、それを参考にしてみよう。

しかし、髪がここまで多いと少しうざったいな……。

「それじゃ、明久のところに『司～！おっはよ～！』明久？」
洗面台の鏡で確認していると、珍しく明久の元気な声が扉越しに聞こえてきた。
『今日は早く眼が覚めたから僕が朝ごはんを作るよ』
「助かる」
櫛で髪を梳かして寝癖がないことを確認。
顔を洗って意識をスッキリさせる。
『司～！できたよ～！』
「今向かう」
扉を開けて、いつものダイニングに向かうと、明久が驚愕の表情で俺を見ていた。
「つ、司……？」
「ん、どうした？そんな呆けて」
「いやいやいや！だってその格好！！」
「昨日の雄二の作戦を聞いていただろう？」
「あ、ああ……うん、そうだったね」
明久が少し顔を赤くしながら料理を運ぶ。
「どうだ？髪を下ろすと印象が変わるか？」
「え、えっと……うん。凄く変わった」
「そうかそうか。これなら大丈夫だな。作戦は上手くいくといいのだが」

「えっと、そう……かな？」
「幼なじみがそう言うんだ。大丈夫だろう」
「（凄く人の注目を浴びると思う……。そのときは……）」
ん？明久からなにやら不穏な空気が……。

「それじゃ、早く食べよう。明久の手作りは久しぶりだし」
「そ、そうだね。早く食べよう！」

明久はそそくさと食器を並べ、朝食の用意をする。
目玉焼き・サラダ・白米と、とても美味しそうだ。

「「いただきます！」」

そういえば、この小説朝食場面が多いような……って俺は何の話をしているんだ？

「司？どうしたの？」
「いや、なんでもない。明久の料理は美味しいなぁ」
「そ、そう？司のだってすっごく美味しいから。勉強になります」

そう言ってもらえると嬉しい。
実は明久も今日みたいに料理を作ってくれる時があるのでそれが特に楽しみなのである。
明久が手を合わせる。皿を見ると既になくなっていた。
俺も急いで食べる。

「ふぅ……。皿洗い完了！それじゃ、行くか！！」
「そうだね！」

靴を履き、玄関の鍵を閉めて登校……なのだが、

「……視線が気持ち悪い……」

周りから、特に登校中の男子学生からの視線がやたらと俺に向かってくる。
普通の制服を着ていたときよりも段違いだ。

『うわ……見て見て瑞穂ちゃん！あんな可愛い子がいるよ！？』
『ほんとだ……あれ？』
『どうしたの？』
『なんだろう……、あの女の子』

どこからか良く分からない声が聞こえてきた。
声のする方を見ると、女性二人がこっちを見て立っている。

「あれ確か聖應女学院の制服だよ……。お嬢様学校の」
「そうなのか。（にしても、あの栗色の髪の女生徒）」
「『（凄く親近感が沸く。なんでだろう？）』」
「あ、司！時間がもう無いよ！」
「了解！急ぐぞ！……できれば西村先生に見つからずに」

俺たちは視線を省みず、猛ダッシュで校門まで走った。

「む？遅いぞ吉井！と、誰……だ……？」
「すいません！時間が無いので説明は後ほど！！」

「すいませーん！」
西村先生の脇をすり抜け、明久あ教室、俺は体育館裏まで駆け抜ける。
「……今の声、まさか……？」
西村先生の呆然とした呟きが風を切る音と共に入ってきたのは気のせいだろう。

そして体育館裏。

「……よく似合ってるな」
「……女子にしか見えない」

雄二のほかに、もう一人康太が立っていた。

「悪い、ギリギリだったな」
「いや、大丈夫だ。ムッツリーニ、情報を」
「……了解。現在、Ｂクラスは生徒が全員集まっていない上にバリケードを製作している様子。これなら一人増えても問題はないかと」
「そうか。ご苦労だったなムッツリーニ。と、言うことだ。司はそこに潜入して俺の合図を待て。あと、この通信機で敵の状況を教えてもらいたい」
「了解。髪で隠していたらばれる心配はないな……」
耳につけ、髪で耳を隠すように垂らす。

「どう？」
「いけるな。それじゃあ頼む」
「任せろ」
「……頑張れ」
「ああ。行ってくる」

「おい」
「ん？」

後ろから声をかけられたので振り返る。
根本だ。トイレから帰ってきたところと見える。

「う……ぉ」
「あ、ね……代表。すみません遅れました」
「あ、ああ。早くもどれよ……（こんな綺麗な奴、うちのクラスにいたか？）」
「あ、あと……」
「ん？」
「チャック、開いてますけど」
「んなぁ！！」

恥ずかしそうにズボンのチャックを閉める根本。
いや～、面白い反応だ。

「い、今のは無しだ。忘れてくれ！」
「はい。急ぎましょう。時間がありませんし」
「あ、ああ……」

さてと、ここで根本君に出会えたのは幸運だ。
ここにいるということは教室の方は準備が完了して待ち伏せができているということ。
上手く情報を抜き出せれば。

「すみません、体調が悪くFクラスとの戦争の話しが聞けていなかったのですが、プランは？」
「とりあえずは時間稼ぎだな。それに、今回は相手の策の一つは封じることができた」
「そうなのですか？」
「ああ。これはFクラスにとって大痛手だろう」

詳しく聞きたいところだが、深入りは逆に危険かもしれない。
とりあえず、策の一つは雄二たちに伝わったはずだ。

「相手のパワーバランスはがたがただ。特攻なんて馬鹿な真似はしないだろう」
「そうですね」

それをするのがFクラスなんだけどな……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7128u/

俺の馬鹿な幼なじみ

2011年10月23日00時08分発行